



回想 開高健

谷沢永一

新潮社

回想開高健

一九九二年二月二〇日発行

著者 谷沢永一

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号一六二

電話 (業務部) 03-33266151
(編集部) 03-33266154

振替 東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社



© Eiichi Tanizawa 1992,
Printed in Japan

(乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。)

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-384501-5 C0095

回想 開高健——目次

一	出会い	7
二	『えんぴつ』創刊	23
三	若い家長	35
四	「印象採集」前後	51
五	紙喰い虫	69
六	木曜会の日々	85
七	「世評未だ一言をも加へず」	
八	絶交	115

九 結婚 132

十 寿屋宣伝部 140

十一 東京そして『洋酒天国』 157

十二 芥川賞 168

十三 ベトナムへ 185

十四 書誌 191

十五 通夜の光景 196

十六 その後 208

装画
荒木
経惟

回想 開高健

一 出会い

出会い

昭和二十五年、一月。大阪。すこし変わった語学塾に、私はまぎれこんでいた。

主宰するのは森下辰夫。京都大学のフランス文学科を出たといえ、もちろん就職難であつたろう。おそらくは紆余曲折のすえ、満洲へ赴き、建国大学の教授になつた。ゆえに一律の公職追放に遭う。帰国してのち、『言語哲学序説』など著作のかたわら、帝塚山学院の校舎を借り、週に二日の夜、日本語をいっさい口にしないで、フランス語とドイツ語を教えていた。

そのとき、私は関西大学国文学科の二年生、キャンパスへ足をはこばないフテクサレ学生であつた。書斎にこもつてばかりの毎日に倦いて、誰から聞きこんだのであつたか、殊勝にもフランス語の勉強を思いたつたのである。それなら学校の授業を受ければよいものを、とにかく、形式に即しての行動がイヤだつた。なんでもいいから、身の処し方では、型やぶりを待望していたのである。

しかし、この選択は失敗だつた。生来、はなはだしく勤がにぶいため、単語の指し示すところ

がさっぱり理解できない。それに、塾生の主なメンバーは、かなりフランス語に熟達していて、あたらしく教えを受けるといふより、自分の学力をたしかめ楽しむために来ている。熱烈な親衛隊が、森下先生をとりかこんでいる。私は内心すこしすねて、授業料が切れたらやめようと心にきめていた。

今から思えば、ほんとうに際どい時期だった。私にとっては最終出席かその一回前のことである。一月下旬であった。すでに日が暮れている。学舎の廊下は暗い。それでも活字中毒の私は、とぼしい電燈を頼りに、壁ぎわの椅子で、なにか本を読んでいた。そこへ、向う側から、意を決したようにツカツカと、突き進んでくる足音がした。気配で、わずかに顔をあげようとした私の、その頭の上から、

タニザワさんですかつ、ぼくカイコウですつ。

大音声が降ってきたのである。私はとびあがるように腰を浮かした。そこには、私より少し背の高い、かなり怒り肩、無帽の、学生服を着た、同年輩の男が立っていた。まず、その声が格別であった。切り裂くように鳴く鳥の声にも似た高音で、しかも響きが重く厚い。私はその声に衝撃をうけた。威圧感とはちがう直射の活気が、真正面から鋭く伝わってきたのである。

しかも、そのセリフは凜然としていた。まったくの初対面で、彼のことをいささかも知る筈のない私にむかって、「カイコウという者です」という風には彼は言わなかった。そしてただちに言葉を継ぎ、天王寺中学で、一年後輩に当ることを告げ、彼が知る私の友人の名を挙げるのみだった。すべて、簡潔で、無駄がなかった。

そのとき二人の間に生じた磁場をふりかえって、私は十数年前にこう書いた——「生来の怒り肩を更に聳やかして突っ立っている胸の薄い十九歳の彼の全身から、あとで自分をかなり甘やしつつ回想すれば、私に何かを求めているらしい青年期特有の体温放射が誤解の余地なく感得されて、それが瞬間に私を酔わせたのではなかったか」——。こういう昂ぶった気はすかしい口調でしか表現できない咄嗟の呼吸が、そのとき通いあったのだけは事実である。数え年でなら、開高健、二十一歳。私、二十二歳。我われ二人だけにとつての、四十年におよぶ歴史がここにはじまった。

彼は、その場しのぎの口数を重ねず、ただ直截に、遊びにいつでもいいか、と訊ねた。否も応もあろうか。私たちはただちに後日を約した。あつというまの気合いであつた。私の返事をつかみとつたかのような身振りで、彼はさっさとまた向う側の、もとの場所へとたちさつていった。おそらく私は呆然としていたにちがいない。

その来訪は早かつた。翌日か、翌々日の夜であつたと思う。開高は、大森盛信と連れだって、夕食後、我が家に姿を現わした。大森は、大阪市立大学文藝部の世話人である。市大へ入った開高が、そこではじめて見出した友人である。開高が得た友人のほとんどがそうであつたごとく、大森の開高に対する敬愛は、みごとに終始かわらなかつた。言うことは、なんでも聞く。することは、なんでも許す。そこには、母性のような友情が認められた。

ずつとのちの話である。開高が、作家として、まばゆい活動をしていた頃のことである。大森は厳肅な顔つきで、二枚の原稿を私に見せた。昭和二十四年のなかごろ、大阪の地方紙が四百字

の掌篇小説を募集したのに応ずるべく、開高がとりあえず二篇を書いて見せたのだが、そのとき大森の見るところ、これではアカンぜ、やめときいな、僕、あずかつとく、と、蔵いこんだのであるという。私はそれを真剣に読んだ。まちがいに開高の筆跡である。しかし、と、首をかしげざるを得なかった。文章が、内容が、どうにも開高らしくないのである。わかつたやろ、と、大森が私の顔をのぞきこんだ。あいつ、はじめ、こんなやつてん、それから、パツと、化けよつてん。私も、この原稿と、「印象採集」以後との落差に、驚かざるを得なかった。

大森は、私の表情をたしかめてから、身をのりだして、おもむろに釘をさした。これ、絶対、発表したらあかんぜ。そこで、私もいささか抵抗した。そやけど、これ、ひとつの文化財やないか、あの開高でさえ、最初はこういうのも書いてたんや、という絶好の資料やと思うけどな。

そう言うやろとは承知の上や、と、大森は口をとんがらかした。君は、なんや文献学者のつもりやろから、そんなヨソユキの気楽なこと言う。僕は違^{ちが}う。開高の名誉のために、これはやつぱり処分する。そうすんのが、あずかつた僕の責任やねん。私は大森の気魄に打たれ、引きさがらざるを得なかった。

そういう心情の大森を、誰しも心細い新人生の身で、さっそく友人として確保できたのは、開高の、わざと決まり文句を使うのだが、やはり、人徳、だった。決して物柔らかな性格ではない。愛想は悪い。しかし、或る種の限られた支持者を、強く惹きつけて離さないのが、生涯、開高の羨やましい特技だった。彼は、自分が選んだ数多くない知己に、したたるような思いをこめて接した。誰にでも、ではない。開高は、自分にとって必要な少数者を、特別あつかいする名人だっ

たかもしれない。

私の狭い書斎へ入ってきたのは、もちろん開高が先だった。精一杯、胸をはって、である。親ゆずりの広い屋敷に住んでいる大森は、辟易したように肩をすばめていた。三人は顔をつきあわせるようにして座った。

この部屋は、のち、開高の青春の、ささやかだけれど打ち消しがたい一齣をなすに至る。大阪市阿倍野区昭和町、いま地下鉄谷町線の通じる地表に、南海電鉄平野線のチンチン電車が走っていた。その文の里駅から南へ桃山学院へ通じる細い路にそって、昭和十年代に借家が建ちならび、戦災をまぬがれたものだから、ほとんどの家には二世帯以上が住み、つまり人口激増の結果として、桃山通りはたちまち商店街と化している。その南端に近い八軒長屋のひとつ、二間小間中、大阪でもっとも標準的な庶民向きの借家を、終戦ただちに探しだして、父がベニヤ板の小売商をはじめた。

当時は必ず長屋の裏、格好だけの塀の奥に、幅半間の汲み取り道があり、塀の内側は、朝顔でも植えるように、ほんの僅かながら空地となっている。父は三十歳すぎまで大工の若棟梁だったから、設計普請はお手のもの、それに生来の工夫好きであるから、このありがたい空間を見たら、もうじつとしてはおれない。裏の塀の上の、まあ言うなら二階に、幅はこの家のほぼ間口いっぱい、奥行きは、外側へ張りだして汲み取り道の分の半間、内側へも半間、つまり合計約四畳分の小部屋を、自分ひとりでたちまち作りあげた。ここへ長男の私を押しこむと、弟および妹の勉強部屋にも、なんとかゆとりが生じるのである。そのいじましい才覚は、他に例を見ない気働きで

あったが、塀の上とはいえ共有地の専用に、しかし近隣の誰もが文句を言わなかった。その頃はみんな自分の商売に忙しく、実害のないかぎり、他人のすることに構っている暇はなかった。いちおう善意に解釈するなら、今ほど人びとの嫉妬心が強くなり、万事に鷹揚な時代だったのである。

その鳩小屋、窓のある北に向かって机と椅子、東と南はすべて本棚、まんなか小高く低いテーブルと、来客用の椅子ひとつ、これだけでも身動きならぬのだが、そこへ二人連れが現われたものだから、私はあわてて、ありあわせの堅い学校机の椅子のようなのを都合してきた。それを西側の、整理棚のくぼみに押しこんだら、それだけで部屋は一杯である。開高は、当然のように、奥の、もとからある椅子にすわった。

最初の話題は、村元恒生のことだったろう。村元は天中で私と同級、ともに回覧雑誌『蟬騒』をつくった仲間であった。一年おくれて旧制大阪高等学校に入ったので、開高と同期である。のち村元は京大に合格して離れ離れになるが、開高にとって、私との縁をつなぐただひとり共通の友人だった。その時もそれ以降も、開高は肝心なことに触れなかったが、森下塾へ私が通っている旨を開高に告げたのは、おそらく村元だったようである。

のち、私は、開高がフランス語にもかなりたしなみがあると知るようになった。すくなくとも原書を何十冊かは持っているのである。おかしいな、と、私は思った。それなら、とりたてて森下塾は必要でなかった筈である。もちろん、彼は私より上級のクラスに入っていたし、語学に磨きをかけるのは、たしかにそこそこ有意義ではある。とはいえ、どこか腑におちない。開高は、

私と出会うなり、森下塾をやめてしまったのである。私は、ひよっとしたら、狙いをつけられていたのかもしれない。

我が書齋への来訪は、あとで思いかえすと、一方的なオーディションだったのである。そんなことは想像もできず、おっとりとして平板に對している私は、立会人である大森の眼に、さぞや滑稽に映ったであろう。

開高は、ほとんど先天的に、身近かな誰それをめぐるの噂話が下手だった。まったく興味を示さなかった。同時代人ではあっても直接の關係がない人びと、そして時空をこえた大きな存在、その種の話題は好きであり豊富だった。しかし、彼がなによりも嫌ったのは、湿氣をおびた浮世のシガラミであった。体をふるわせるようにして斥けた。よほど好みにあう人の場合でも、その言及は断片的であり淡泊だった。

そこで、二人にとってのキズナである村元に少し触れたあと、儀礼を終えてせいせいした面持ちで、さつそくに文学談がはじまった。広津和郎の回想によると、宇野浩二は、話柄が俗事に及ぶや否や、それより文学の話をしようよ、と、急いでさえぎった由であるが、それに劣らず、若き日の開高も、文学談しか好まなかった。のち、『夏の闇』で自分を完成させてからは、逆に、文学談を拒絶するようになるのだが、それまでに、彼は、こと文学談に関するかぎり、生涯の予定数を終了したのかもしれない。そうとでも言いたくなるほど、若き日の彼は、会っている間じゅうずっと、文学談でこつてり私を苦しめた。

しかし、同時に、彼はやさしくも息抜きを用意してくれていた。それは、自分自身についての

尽きない語りである。彼ほど自分を語ることに打ちこむ人は稀れであった。果てしない没入であった。それが、もし、ナマのまま、裸のまま、であったなら、或いは堪えがたかったかもしれない。幸い、それにはフィルターがかかっていた。彼は、実は聞き手をダシにして、ひたすら表現を練っていたのである。それは、すべて、舞台稽古だった。リハーサルだった。彼が素っ裸で自分を語ったことは、絶無とは言えまいが、ほぼそれに近いだろう。彼の自己描写は、相手を興じさせるための演技であった。迷路にさまよいこみがちな文学談から気分を解放するための、多少は得意でなくもない幕間狂言だったのである。

そんなこと、まだ何も知らないから、私は、はじめて接した陽気な饒舌家の、突っ拍子もない大声を真向に受けながら、その豊富で質実なヴォキャブラリーの絢爛を楽しんだ。この日この時まで出会ったことのない、今にもはちきれんばかりの充実、その光景の芯にあるのは、ひたすら滾々と湧きでてくる透きとおった泉の迫力であった。

この時期まで、我が国の文学青年を育てあげたのは、大正末年からほぼ十年にわたって、おびただしく刊行された各種多様の文学全集類、頒価が並製は一円であったゆえ、円タクになぞらえて円本と呼ばれた厖大な叢書である。岡本一平えがく唯野人成が、机上にうずたかく積みあげてアクビしているように、手のとどくところ至るところに死蔵されていた。売れなかった在庫分がゾッキ本となつて古書店の均一となる。昭和期の、読書の普及、教養の均霑、文化の浸透、その象徴であった。

開高は、円本の文学関係、その主なところはかなりの範囲にわたって咀嚼していた。とりわけ

『世界文学全集』には詳しくあった。どちらかと言えば、大作よりも小味な佳品、バルビュスやハムスンには思い入れが深い。一方では、シェンキーヴィッチの、もう一歩で紙芝居におちいりかねない道具立てを、あやうく救っている陽気なペダントリー。なんのことはない、私は順を追いつつながら試されていたのである。

開高の評言は瞬発であった。語彙、とくに修飾語が、あらかじめ周到に準備されている。彼が、生涯、決して口にしなかったのは、何と言ったらいいか、という類いの、今はますます濫用されている間投語だった。また、口ごもりがない。晩年には、言外の意を伝うべく、意識して無言の表情を活用したが、若き日には、勿論そういう熟成など見られなかった。打てば響く、であるどころか、打たなくても勝手に鳴り響く、の概があつた。一言こちらが発すれば、頭の上で大きなバケツの水をひっくりかえされたかのように、即座に大量の評言が降りそそぐのである。

それでも最初は遠慮していた。あまり畳みかけないように自粛して、彼としては断言の度を控えていたフシがある。慎重に私の反応を見ていた。肯定的な反応を見届けた場合にのみ、ようやく発言の手綱をゆるめる。その配慮が刻一刻と伝わってきて、我われの呼吸は間をおかずほとんど一致した。

私の悪しき性癖は、文学なら文学の、作品にはもとより愛着するが、それと同時に平行して、作品の成立史や評価史に淫する渉獵である。誰にも言うわけではないものの、かなり以前から、解説読み、とひそかに自任していた。たしかに我ながら滑稽なのだが、いかなる書物の場合でも、序、跋、解説、かりに貶しめて言うならそれら附屬品の類いに、まず惹きつけられるのである。